**〔解　　説〕**

安永九年（一七八0）江戸外記座にて初演。紀上太郎、烏亭焉馬、容楊黛の合作による全十一段の時代物です。由比正雪の乱に、奥州白石であった姉妹の仇討ちの実話を絡ませた筋書きですが、仇討ち物なので時代を太平記の時代に置き換えています。七段目で姉妹が巡り会う「新吉原揚屋の段」は、姉妹の言葉使いの違いがおもしろく、芝居でも人気となり度々上演されています。

**〔新吉原揚屋の段　あらすじ〕**

大黒屋の傾城宮城野は、大黒屋の亭主惣六が連れてきた田舎娘おのぶが故郷に残した妹だと気付き、二人きりになったところで母親が持たせた証拠を互いに見せ合い、再会を喜びます。しかし、おのぶの口から父母の死を聞き、妹とともに父の仇討ちを決意し、廓を抜けだそうとします。それを立ち聞きしていた惣六は、曽我兄弟の仇討ち物語を引き合いに出して二人を諫め、その時が来るまで待てと諭すのでした。

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。

 (一般社団法人　義太夫協会発行)

**新吉原揚屋の段**

入相の、鐘さへはやく、暮れはてゝ廓のうちは万灯会歌舞の菩薩の色揃へ、わけて全盛宮城野が部屋は上品奥二階、箪笥長持鏡台の、埃取りまで綾錦袱紗なりけるありさまなり。この君の一宇なりとも次の間から、宮里宮柴打連れて

「太夫様ご機嫌はえ、ホンニさつきに貸本屋が参じて、『先度の曽我物語の次ぢや』と言ふて、置いて去んだぞえ」

「イヤ申し宮柴様、けふのお客は仲の町の蔦屋から、締めからんだ二人一座、宮城野様はもとよりお前もはよう身仕舞して」

「オヽ忙し、いま身仕舞をするわいな、しかし差合ひな顔はないかえ」

「イエ〳〵どれも〳〵侍衆、一人のお方は器量よし、今一人は髭むぢや、日の大きい、熊か人かといふやうな、どちらへ札が落ちようやら、厭なことではないかいな」

と、いづくの浦も客噂、そしるもの習はしかや

「アヽコレそんな事言ふて、遣手衆が叱ろぞえ」

「オヽ叱つたてゝあたをかしい、イヤをかしいついでに、きのふ旦那様が浅草で、抱へて戻らしやんした奉公人、モをかしい物言ひではないかいな」

「サイナア遠い国から姉を尋ねて上つたとの話宮城野様の慰みに、連れて来てお目にかけよ、お前もお出で」

と連立つて、行く後影見送りて

「テモさても、わさ〳〵一人物言ふて、よい気ではあるほどにの、コレしげり、そなたはそこら片付きや」

と、言付ける間もありやなし新造二人が伴ひに、厭がる者を無理無体突き出されたる田舎の娘、傍りきよろ〳〵つひに見ぬ、錦の小より三つ蒲団、興醒め顔に

「オヤ〳〵〳〵おん女郎さあたち、人がよく寝そべつてをるところを、用さある来とらへと、二階さあへぶつち上げて、コリヤマア何たるところだ、もしやあどこもかも光り申して、お洒落の櫛さあ見るやうに、塗りこべえた箪笥さあ、その上夜の物も金切れたものしあ、蒲団も蘇枋染の色のよさア、うんら寝まつたら、踵の皹さあ引つかゝつて、うつ切れべえ、おやつかな魂消申す〳〵」

と言ひければ、打ちこけるほどをかしさ隠し

「コレそこなお子、お前の故郷国所、こゝへはどうしてお出でた訳、話して聞かさんしよば、お力ともならうに」

と、なぶると知らずしく〳〵泣き

「オヽやさしな詞お言やり申す、わんら国さあ奥州、やにやうすあつて別れ申いて、このお江戸さあはあらく盛る所だあと聞き、その上姉さア、この吉原で名高え女郎さあになつてゐさるとの話、の身として、敵なえ思ひをして尋ねて来るも海山、物語りのある事、聞いて哀れを添へてたべ」

「オヽモ何も言ふぢややら、すつきりと訳が知れぬ、そしてマア吉原で、名高い女中を姉様とは、モ雲つかむやうな尋ね物」

「サアそれだアから頼み申さアよ、きのう観音さあで、目眼のおつかなえ人が、連れて行て会はしてやらうつと、駕籠さアにぶち乗せて来るところを、これのご亭の世話さあになり申いて、昨夜からゐ申さアよ、脚かけ申すも他生の縁、ほんでござるわよ赤はらはたれ申さぬぢや」

「ホヽヽヽヽオヽ聞けば聞くほどをかしい話、そして今の赤ホヽヽヽヽモ、赤はらとは、あられもない」

と若い同士、糠もくづるヽ高笑ひ、知る人ぞ知る宮城野が、押ししづめて

「申しお二人、浪花の芦も伊勢の浜荻、所々で変る物言ひ、そのやうに笑はぬもの、今あの子の言ふてぢやあつた、だたあやがあまといふはな、ここで言ふ父様母様、または赤はらと言ふてぢやは、嘘はつかぬといふ事ぢやわいな」

「さつても我折れマようご存じ」

「オヽ知つたも無理か憂きふしは夜毎日毎に変る枕、心尽くしの果ては愚か、奥のとろくのお客にも馴れ親しんだ身の一徳、オヽそのお客で思ひ出した、奥のお客がやかましかろ、私も追付けそこへ行く、先へお出でてよいやうに、コレ〳〵しげり、仲の町の井筒屋へ行ての、きのふの返事聞いておぢや、サ早う〳〵」

と言ふ下から、遣手の政が例のしやぎり

「サア〳〵〳〵〳〵奥のお客のお待ちかね、何話してゐさんすぞいなう」

「オヽ忙し、そんならわしらも奥へ行て、お客選みの栄耀も言はず、寝そべる度に、アヽ何やら、オヽそれ〳〵、赤はらたれて気に入つて、日がら頼も」

と口々に言ふて、座敷へ行く、ふりを見やる宮城野おのぶが傍、『もしやそれぞ』と摺り寄つて

「さつきにからの話を聞けば、姉を尋ぬる人さうな、奥州はどこらの生まれ、なんといふ所ぢやえ」

「アイサア、奥州は白坂近在、逆井村といふ所」

「フウその逆井村といふ所に、与茂作といふお人があらうがの」

「アイサ、その与茂作といふのはめらしが父」

「ヤアそんならわしが妹」

と縋り寄るを突退けて

「イヤサ〳〵〳〵、母の常に言はしやるには、『姉さあの方にもしるしがある、それを証拠に名乗り合ひ、委細心底打明けろ』と言ひめした、それがあるなら早うつん出し、見せてくんせえ姉さあ」

と懐かしながら油断なき

「オヽ利口な人〳〵、疑やるも尤も」

と立つて箪笥の袋棚襖開けば恭しう、浅草寺の観世音、扉表具に押並べ、飾り置いたる筒守り見るに妹も疾し遅し首にかけまく壺井の守り

「コレ〳〵〳〵、この姉が国を出る時、母様が大事にせいと下さんしたこのお守り、父様は楠家のご浪人ゆゑ、河内の国壺井八幡様のお守り、それを持つてゐやるからは妹ぢや〳〵コレ、よう顔見せてたもいなう」

「オヽ姉さアでござるかいなう、会ひたかつた」

ともろともに、嬉し懐かし鎚り寄り、ほかに詞もなくばかり。かくぞといざや宮城野が座敷へ出ぬを不思議さに、来かゝる亭主惣六が、様子ありげな部屋の体、忍んで事を立聞くとも、知らずひそ〳〵話

「オヽ妹、よう尋ねて来てたもつたの、年端もいかぬそなた、父様なりと母様なりと、いづれぞ付いてお出でゞあらう、がもし道中ではぐれてか」

と、問はれて『わつ』と声を上げ、

「アヽコレかう巡り会ふからは、悲しい事も何にもない、泣いては済まぬ、サどうぞ」

と、尋ぬる姉の心もそゞろ

「エヽ隔つた姉さあ、それで何にも聞かねえな、父は五月田植の時分、代官志賀台七という悪侍に」

「ヤア〳〵何と言やる」

「ぶつ斬られてお死にやり申した」

「ヒヤア」

とびつくり差込む

「アアコレ姉様いの〳〵」

「アヽヽヽとつとモウ悪い時、そうしてどうぢやその後は」

「サア俺だけもすんでの事殺さるゝところ、庄屋の伯父さあが駈つて来て、力んでみても肝心の、証拠なければ父は犬死、雉子と鷹なりや敵討の勝負もならず、すごら〳〵、そんだの許嫁のご亭にも対面はしたれども、これもこのお江戸さあへ帰り申す、後は俺だあけと母とばかり、頼りない身に下地の大病」

「ヤア〳〵お煩ひでもあつたかいの、シテご本復なさつたか」

「イエ〳〵六月十六日に、悲しやつひにお死にやり申した」

「ヤア〳〵スリヤあのご養生も叶はなんだか〳〵いの」

「コレ話聞いてさへそれがいに歎かつしやるもの、直きに見とらへた俺だあけが心、コレ泣かつしやるは道理だけれど、頼りに思ふ姉さあ、また病気おこしてはなほか済まねえ、〳〵」

「イヤ〳〵〳〵、なか〳〵煩ふやうな事ぢやない、さうしてどうぢや〳〵」

「サア、なしよにもかしよにも俺だあけ一人、庄屋の伯父さアが引取つて、『奉公しろ』と言ひめすけど、何の奉公どころかい、口惜しいと、悔しいで、後先思はず、檀那寺へ駈込うで、坂東順礼すると言つて笈摺もらい、国元さアを突走つたも、そんだに尋ね合つたら、姉妹心を一致にし申いて、父の敵が討ちてへばつかり、道中すがらの艱難も、そんだに会ふが楽しみに、がいに、苦労とは思はなんだ、しかし会つたらかつぱりと、しよろつ骨が抜けたやうな、コレそれがいに歎かつしやる手間で、妹はるばる尋ねてよう来てくれた、めごいめらしと言ふてくんさい姉さあ」

と、あやも泣入る稚な気に長の旅路の憂き苦労、思ひやるせも宮城野に、続くは末の、松山を、袖に、波越す涙なり、歎きのうちも姉はなほ、妹が背を撫でおろし

「オ、そのやうに思やるも尤も、しかしそなたは父母に、長う添やつた身の果報、コレこの姉を見やいなう、年貢に迫つて父様は水牢、その苦を助けうばつかりに、コレこの廓へ身を売つたを、思ひ返せば十二の年、そなたは五つ子顔さへ見知らず父様のご最期や、母様の死に目にも会はぬといふ悲しい不孝な、はかない事があらうかいの、かうした事とは露知らず、この妹は健なか知らぬ、父様、母様、お煩ひでもあらうなら、よもや知らして給らうもの、便りのないを杖柱、首尾よう年季を勤めたら、国へ帰つてお二人に、楽させまして、どうしてと、色や浮気を嗜んで、勤め大事と許嫁の殿御の事も、そなたの事も、恋し懐かし思ふのを楽しみ暮した甲斐もなう、名乗り合うたは嬉しいが、悲しい話聞く姉が心も推してたもいの」

と、手を取交す姉妹が涙涙を、立聞きも貰ひ泣きして立分の、暖簾も濡る、ばかりなり。